

第十節 東山千栄子の俳優志願（第一年十二月①『朝から夜中まで』）

大地震の惨禍に直面し、茫然自失した東山千枝子は、真に価値あるものと己れの生きがいを模索しつつあった。戯曲『朝から夜中まで』の観劇に赴いたのは、築地小劇場の開設半年後である。主演の千田是也は妹を通しての知人であり、かつて商社の在留家族として彼女がモスクワで小山内薫を接待したこともあった。

築地小劇場への観劇と志願（東山千栄子著『私の歩んだ人生』）

はじめて私が築地小劇場で観劇したのは、その年（大正十三年）の暮れ近く、演目はゲオルグ・カイザーの『朝から夜中まで』という表現派のお芝居で、千田是也さんの主演でした。中江家へ嫁しておりましたすぐ下の妹百合子がドイツ語を千田さんから習っておりました縁で、妹に誘われて参ったのです。

大みそかが間近いというのに、世間のあわただしさとはまったく没交渉に、すべてを芝居に打ち込んでいらっしゃる人たちを見、感動したというより、まずびっくりしてしまいました。舞台と観客席とのふんいきには、かつてのモスクワ芸術座を思わせるものがございました。

これだ！と思いました。私ははじめて私の情熱のはけ口をここに見いだした気がしたのです。そこで小山内先生にお目にかかりました。先生はまさか私を女優志願者とはお考えにならなかったので、おそらく気を

ゆるされたのでしよう。こんなことをお話しになりました。

「築地小劇場は女優がいないので困っているのです。私たちは別にくろうとの人は必要としません、しろうとでいいんです。ことに困っているのは、中年の役をやる中年の人がいないことです」

これこそ私にとって願ったりかなったりではありませんか。私はそのとき数え年で三六歳でしたから、たしかに小山内先生の望んでいらっしゃる年ごろといえましょう。そして、申すまでもなくしろうとです。私はたちまち本心を聞いて、女優志願を先生に熱心にお願ひしました。

予想外のことに先生はすっかりお驚きになり「中年からはいつて成功した人はいないのだが」とおっしゃいましたが、何がなんでもものと、私は研究生の入所試験を受けさせていただきました。そして大正十四年二月のある明るい午前中のこと、岸輝子さんと村瀬幸子さんと私の三人が試験を受け、三人とも研究生にしてくださいことができました。岸さんも村瀬さんもお若く、私だけが中年の人妻でしたが、いまでもこの三人は仲良く同じ俳優座におりますことは、なにか運命の不思議さをお知らせします。

私が俳優を志願したのは、主役をさせていただきたいなどという大それた考えからでなく、女中さんの役でも、おばあさんの役でもなんでもいい、ただ俳優としての勉強がしたかったのです。それによって、私の生きがいを見いだしかったのです……

研究生になってからは寝る暇もないほど忙しくなっていました。私たち三人よりさきに試験にパスしていらした方がたのうちには、現在劇壇民芸にいらっしゃる滝沢修さんや、同じく民芸にいらした伊達信さんなどがおいででしたが、勉強では同期生として同じレッスンをうけました。はじめ私は、研究生というのは、一、二年はじっくり基本を教えていただくのだらうと思っておりましたところが、一ヵ月もたたないう

ちに、すぐに舞台へ送り出されてしまいました。

記憶をたどってみますと、最初の一年間に十四の演目に私は出演しているのです。なにぶん当時は一カ月に三公演あったのですから、とうてい人手が足りず、しかも群衆が必要だったりして、研究生だからといってレッスンだけというわけにかなかったのです。

午前十時からグルクローズや発声などのレッスンがあり、午後につぎの公演のためのおけいこ。そして夜は舞台があります。それが終わって、ほっとして銀座でお茶を飲んだりして大森の家へ帰り、おふろにはいつて寝るのは、したがつてたいい夜の十二時を回っておりました。しかもつぎの公演にせりふがあれば、夜中にその暗記もしなければなりません。①

女優修業と家庭生活（東山千栄子著『新劇女優』）

私の築地入りが、夫を初め親類一同にとってどんなに迷惑なものであったかは、時代が古いだけに、今の皆さんでは想像して下さることも出来ない程です。生家を初め、芸事を卑しむ一族の中で、狂気の沙汰といわれ、親しい行ったり来たりから孤立しなければならなかったのも当然です。しかし主人は私の事後報告に對し、如何にもその人らしい理解で、むしろ真実からの助言をしてくれました。それはかねて新劇に對して抱いていた意見でもあって、「教育者になったつもりで」ならよからうといい、もう一つは「金をもらわな

① 東山千栄子著『私の歩んだ人生』三一―三四頁。

いで」という条件で、私がこれを守るなら黙認ということになりました。それで河野千子の本名では主人の仕事にもひびきましたから、東山千栄子と名乗りましたが、「金をもらわないで」ということが、私の芸道精進の純粋をどんなに保護してくれたか知れません・・・

芸能に生きる婦人は家庭生活との両立が困難だということ、これは著しく解放された現在でもよく問題になることですが、剛情な私にも、寛大な主人に對し氣の毒であったと思うことが、沢山記憶に残っています。

長く外国に暮らした主人も、日本に帰っている時には、やはり家庭的な休息の時がほしかったでしょう。けれども劇場が果てて私が家に帰るのは。夜が更けて世間が寢鎮まるってからで、いつも鍵で裏門をあけ、あとを閉めて庭を通り、自分の居間にしている茶室の戸をまた鍵であけて入りました。それから母屋の湯殿へ、これも外からあけて入り、その時分は主人も家の者もすべて眠ってしまっていました。朝私が起きた時分には、主人はもう出かけて常の日課に就いていました。食堂に入って行くと、用事が書いて食卓の上に置いてありました。同じように私が主人に用事を書き、女中がそれを渡してくれることもありました。話し合わなくてはならぬこの場合は、劇場から電話をかける。或は店からかけて来る。長い間顔も見ないことが珍しくないという次第でした。献立だけでもしておいてくれといわれても、それもよく出来なかったことなど折りにふれて思い出します。①

① 東山千栄子著『新劇女優』五六―五七、五九―六〇頁。

表現主義代表作のひとつ、カイザー作『朝から夜中まで』は、資本主義の最先端、金融機関における犯罪を主題とする。これが上演される大正十三年十二月の『築地小劇場』には、関連していくつかの文献が掲載された。つぎの解説は簡略ながら、演ぜられる戯曲の核心を示している。

オーマンコヴァリ・巖谷三一訳 『朝から夜中まで』について

ゲオルグ・カイゼルの戯曲の内には芸術的に価値あるものや、舞台芸術として成功しているものが沢山あるが、『朝から夜中まで』におけるように彼の性格をかほどまで明瞭に反映させたものは少い。詩人カイゼルはまたもやその主義、すなわち〈人間改造〉とそのことを忠実に守っている。

一人の銀行会計掛を主人公に取って来て、彼の金銭に対する呪いの理論を發展させている。この会計掛と云うのは、ある銀行の支払口に半生を送り、生ぬるい義務の奴隷になっている男である。そして彼の家庭には彼式の人間を満足さし、幸福にさすところの一切のものを持っている。彼を愛し、彼のためにイソイソと働く女房だの、娘だの、彼の立身出世を望んでいる老母等があった。然るに彼が永年静かに眺めていた金という悪魔が、彼を犠牲として選ぶや、彼は長年の弛まざる努力をもって建設したすべてのものを見捨てて、さらに進んで家庭の幸福を全部破壊して、ただただ一つの幻覚を追い廻すに到る。

その結果彼は果して何を獲得したせあろうか？彼の追求したところのパラダイスはけっして真の樂園ではなかったのだ。それは偽りの歡喜に満ちた空虚な世界であった。その陰には彼が常に逃避せんとつとめていた家常茶飯と同じものがひそんでいたのだった。即ち彼が老母や妻や娘を見捨てた時の平凡さがやはり姿を

現していたのだった。かかる認識を得るとともに、彼は金というものは、世界の人が追求して止まぬものがあるが、決して価値ではないと云うことと、いやしい奴隸的な根性が群衆を支配していることと、外面の美が内部の空虚を覆っていることと、彼が真純の愛と誠とを予想していたところに、残酷な所有欲と裏切りとがかかれていたことを確信するに到ったのである。・・・

『朝から夜中まで』十四時間の間に起こる事件の中心から、この会計掛の姿は一瞬も消えることはない。而して稀に見る技巧をもってこの短い時間内に、腐敗していく文明の悲喜劇的な現象を凝結させて『朝から夜中まで』は一九一一年に出来たもので、カイゼルの作中舞台で成功した傑作のうちに属し、完全に表現派劇の典型と称することのできる作物である。①

『朝から夜中まで』の舞台は産業発展のヨーロッパ、ある市中銀行の窓口として幕を上げる。日夜業務に追われる銀行員は、ある日顧客の色香に眩惑され、金庫から大金を窃盗して、彼女との道行きを企てた。逃走の途中で寸時立ち寄る自宅では、勤務からの帰りを家族が待ち侘びている。

戯曲『朝から夜中まで』（カイゼル作・北村喜八訳）

① Willibald Omarkowski・巖谷三一訳「朝から夜中まで」について『築地小劇場』第一巻第七号。

第一部

小銀行の金銭出納場。左手に出納口の滑窓。及び（支配人）と書いた扉。中央に（金庫室出入）と記号の付いた扉。右手後に押し戸になっている出口。それに並んで藤製の長椅子と、水瓶とコップの置いてある卓。

出納係 金は持つてきました。

婦人 でも、どの道手紙に書いてあるお金だけでは足りそうもないのでございます。

出納係 （小切手と金貨の巻いたのを取り出して）なあに、大丈夫です。

婦人 でも、あたし一万二千マルクきや出せないんですもの。

出納係 六万マルク出せます。

婦人 まあ、どうして……

出納係 旅行に出るんです。

婦人 何処へ。

出納係 外国へ行くんです。荷物があるなら、早く揃えなさい。あなたはこのステエションから立つんです。――わたしは次のステエションまで駈けて行って、そこで乗り込みます。最初の晩に泊まるのが――時間表はありませんか。（卓の上の時間表を見つける。）……

婦人 （驚いて）なにとぞもう止して頂戴。

出納係 わたしは金を残らず取ってしまった。――あなたは銀行へやって来た。――着物が光ったり、さらさら音をたてたりした――あなたは裸の手をわたしの手に載せた――あなた、息が熱く匂ってきた――あなたの口から匂って来た……

婦人 まあ、馬鹿ばかり。

出納係 わたしは奪って来たのです。盗んで来たのです。わたしはあなたに身を任せたのです。――自分なんかどうなっているのです。――自分の帰る橋はすっかり壊して来たのです。――わたしは泥棒です。――私は盗賊です――（卓に打つ伏して）さあ、是非あなたは――是非あなたはわたしと一しよに逃げなくちゃいけない。

第二部

出納係の家の部屋。窓には花の咲いたゼラニウムの鉢が載せてある。正面には、戸口が二つ。右手にも戸口が一つ。卓といくつかの椅子。ピアノ。老母が窓の側に坐っている。上の娘が卓に向って刺繍をしている。次の娘がピアノで「タンホウゼルの序楽」を弾いている。妻が正面の戸口から出たりはいたりしている。

上の娘 お父さんがお帰りになると、お昼ね。

妻 ああ、そうだよ。（去る）

次の娘 （ピアノを止めて、耳を傾ける）お父さんかしら。

妻 （出て来て）うちの人かしら。

母 悴かしら・

次の娘 （右手の戸口を明けて）お父さんだわ。

上の娘 （立ち上って）お父さんだわ。

出納係 （右手の戸口から入って来て、帽子と外套を釘にかける）

妻 何処からいらしたたの。

出納係 墓場から来た。・・・

妻 まだ銀行はしまらないんですか。

出納係 しまるもんか。牢獄は決してしまりはしない。あとから、あとからと、無限に人がはいって行く。

永遠の巡礼の涯しく続く。羊の群のように撥ねながらはいっていく。ー肉の銀行へ。中はひどい雑沓だ。とても逃げられはしない。・・・(パイプをはたく。再び着物を着始める)

妻 銀行へいらつっしやるの。何か御用がおりなんですか。

出納係 銀行にー銀行に用なんぞありはしない。・・・愚図ぐずしてはいられないのだ。(手擦れのした墓口を卓の上に置く) 後始末をしろ。これは正當に得た金だ。この事は大事なことから、よく覚えておくがいい。さあ、これで後始末をしな。(右手から出ていく。)

妻 (身動きもせず立っている。)

支配人 (右手の明け放した戸口から) 御主人はいますか。ー御主人はここへきましたか。ーわたしは気の毒な知らせを持ってきたのです。御主人は銀行の金を持って逃げたのです。それが分ってから、だいぶ時間が経っています。建築組合の預けた六万マルクのお金です。御主人が自分で過ちに気がつけばいいがと思って、事件はまだ公表してはいけません。ーこれはわたしの最後の試みです。わたしは個人としてお訪ねしたのです。ー御主人はここへきませんでしたか。(あたりを見廻し、ジャケットやパイプなどや、すっかり戸の開いているのに気がつく。) この様子ではーああ、事

はもうここまで進んで来ているのだなあ。」 ①

東山千栄子が観劇した『朝から夜中まで』には、山本安英など七名の女優が登場し、うち四名は各々二役を演じた。この舞台における物語の展開や千田是也の好演とともに、これら女性の活躍が東山の俳優志願を助長したことは想像に難くない。

第十七回公演『朝から夜中まで』配役

出納係	千田是也	母	吉野光枝	妻	山本安英	第一の娘	田村秋子
第二の娘	若宮美子	支配人	丸山定夫	門番	原田理一	紳士一	生田健一郎
紳士二	竹内良作	少年	伏見直江	女中	室町歌江		
婦人	花柳はるみ	給仕	洪海星	審判一	汐見洋	審判二	浅野清
審判三	小野宮吉	審判四	横田寿	中年男	汐見洋	仮面の女	若宮美子
救世軍一	山本安英	救世軍二	田村秋子	燕尾服一	東屋三郎	燕尾服二	生方健一郎
娼婦	花柳はるみ	巡査	東屋三郎				

魅力的な顧客に扮する花柳はるみは、築地へ参加する直前、先駆座の復興公演でも主役を果していた。大正四年芸術座の公演ツルゲーネフ作『その前夜』で初舞台に立った彼女は、日本映画の女優第一号としても知られ、新劇協会での主演など、豊富な俳優経歴を有していた。

花柳はるみの俳優経歴（尾崎宏次著『女優の系図』）

花柳はるみが島村抱月・松井須磨子らの芸術座に第一期研究生として入ったのは大正二年（一九一三年）であるが、芸術座の時代にはとくに目立った存在ではなかった。彼女の名が歴史的にしろされる最初は、「日本映画劇の最初の烽火となった」（田中純一郎『日本映画発達史』、あの『生の輝き』と『深山の乙女』の主演女優としてである。映画女優の開拓者となったはるみは、その後青山杉作・村田実らの踏路社や秋田雨雀・佐々木孝丸らの先駆社などにでて、それから畑中夢坡らの新劇協会で伊沢蘭奢とふたりで活躍する時期をへて、やがて発足する築地小劇場へはいつて、初期の大きな役々をこなすまで、かなり波乱にとんだ足あとを残した。はるみのそういう足跡を山本安英さんは、松井須磨子の死から築地小劇場の誕生までのあいだをつないでくれた大事な女優だ、といっている。はるみが生きた時代の多様な演劇集団は、できてはつづ

① 水品春樹著『新劇去来―築地小劇場史』一二九―一三〇頁。

れ、つぶれてはまたできるといような状態をつづけた。そのなかをはるみは泳ぎきったのである。・・・芸術座で『モンナ・ワンナ』や『内部』の群衆に出たはるみは、大正六年に秋田雨雀を顧問として結成された民衆劇社でワイルド作『ウェーラ』五幕に出演してはじめて舞台女優として認められた。彼女がのちに先駆座に出た時から知って居る佐藤誠也氏は、芸術座以後のおもな彼女の足どりをつぎのように語った。「はるみは大正五年に山田耕筰、小山内薫、石井漠らの新劇場公演に一度だけ出た。石井漠は舞踊詩を踊った。場所は喫茶店メーゾン鴻ノ巣の四階である。はるみはシュニッツラーの『輪舞』にでた。大正六年には民衆劇社にでたあと、青山杉作らの踏路社公演に出た。演目は『春のめざめ』であった。さきに書いた映画出演のあと、大正七年には村田実らと黎明座をつくって赤坂の演技座でバーナード・ショーの『ウォーレン婦人の職業』に出た。大正九年には松竹蒲田の撮影所へ招かれて川田芳子、栗島すみ子らと映画にでる。同一年には汐見洋らの研究座でストリンドベリーの『債鬼』やウエデキントの『地霊』のルル、チェホフ作『かもめ』のイリーナなどに出演、十三年に先駆座の公演に参加してストリンドベリーの『仲間』に出演した。『永井荷風日記』第一巻の大正九年十月二六日のところを見ると（帝国劇場に研究座を見る。近來この種の演劇ほとんど数えるにいとまあらず）とされるされていて、新劇団の乱立が思われる。大正十三年の六月にできる築地小劇場の誕生がやがて彼女を迎えるのだが、そのあと大正十五年には畑中夢坡らの新劇協会にでて伊沢蘭奢と共演したり、心座にでたり、前衛座の旗揚げ公演『解放されたドン・キホーテ』にも出演したの

である。はるみの人気はいつも学生たちの間で評判が高かった。①

築地小劇場発足ののち東山千栄子と同じく、自発的に参加を志願したのは、美術家村山知義である。大杉栄の殺害や柳瀬正夢の検束に衝撃を感じ、前衛的な画業復活に着手する彼が、表現主義の演劇に関心を抱くのは当然である。大地震の翌年築地小劇場の柿落し『海賊』に接し、その斬新な舞台に感嘆して、演出者土方与志に助力を申し出た。かくして委任された『朝から夜中まで』の舞台装置について、その規模と製作が自叙伝に詳細で記述されるが、ここでは土方宛書簡と舞台準備の一端を採録するに止める。

村山知義の土方与志宛書簡

一面識もないのに突然手紙をさしあげて失礼を致します。実は築地小劇場の御計画を友人北村喜八君からうかがって、矢も楯もたまらなくなったからでございます。

僕は一昨年一年間ドイツに行き、絵を主に描いていた者でございますが、舞台にひどく興味を持っており、彼地ではほとんど毎夜劇場を訪れておりました。ゲオルグ・カイザーの友人アンゲルマイヤーのドラマのために、模型舞台を作ったこともございます。

日本に帰ってからはマヴォという絵の団体も作り、たびたび展覧会も致しましたから、僕の作品ももうお

① 尾崎宏次著『女優の系図』朝日新聞社、一九六四年。二〇九、二一三―二一四頁。

目に触れたかもしれません。僕のことについては吉田謙吉君も北村喜八君もくわしく知っているはずでございます。

舞台はほんとに僕のかねがねの憧憬的であり、その上カイザーやトラーのものもお出しになる御計画をうかがったので、ついおらえられなくなつて、こんな手紙を書くことになってしまいました。

で、もし願えるなら、僕に舞台装置をお手伝いさせて下さいませんか。自分で言うのも変ですでございますが、舞台装置にかけては絶対の自信がございます。そして熱心さは誰にも劣るまいと思います。・・・

もしお会い下さるのでしたら、日時をお知らせ下さいませ。

またご都合で到底駄目でしたら、ご遠慮なくそうおっしゃって下さいませ。本当に失礼でございますが、他に仕方が」なかったのだからおゆるし下さいませ。

村山知義

土方与志様

①

『朝から夜中まで』のスタッフと舞台装置（村山知義著『演劇的自叙伝2』）

この時主役出納係に扮した千田是也は早くから小石川林町の土方邸に出入りしていた。・・・千田君は私の大道具帳から模型舞台をつくってくれ、それは稽古の時に大変に役立った。また徹夜して色を塗る時も手

① 村山知義著『演劇的自叙伝2』二四八―二四九頁。

伝ってくれた。

その道具帳をつくっている時、よくそばに来て、でたためのいたずら描きをしていた伏見直江は不幸な境遇に育ち、旅廻りの子役をしていたひとで、人に読んでもらってセリフを覚えるのだと聞いて吃驚した。のち映画界に入り、女剣劇の伏見直江として一世を風靡した。

また、この芝居で第二の娘と仮面の女に扮した若宮美子という少女は、透きとおるような、不思議な白い皮膚を持った美少女だった。私は彼女を仮面の女の片脚と片脚丸出しの奇妙な衣装を着付けさせ、マスクから出ている唇に紅をさす時、ブルブルにふるえた。しかし、この美少女はやがて経営部の浅利鶴雄といっしょに姿をくらましてしまい、それきり小劇場に戻らなかった。二人で大島に逃げたということだった。浅利鶴雄は先々代市川左団次の親戚とかで、眉目秀麗な青年で、現在の日生劇場の重役浅利慶太の父である。

花柳はるみはヴァンプ的な、奔放な演技をする女優で、最も華々しい存在だった。松井須磨子のないあと、新劇協会の主演女優だった伊沢蘭蓀と並び称される新劇のスターだった。彼女はこの時以来私に特別の好意を示すようになった。

研究生はさきに述べた千田是也、竹内良一のほか、山本安英、田村秋子、丸山定夫、藤輪和正、小野宮吉らがすべて出演していた。洪海星という朝鮮の青年もいたが、彼はのちに故国に帰って朝鮮の新劇の先駆者のひとりとなった。・・・

軍艦みたいな三貝建の構築は、最後の救世軍の会堂を中央にして、右に銀行の店内を第一階に、出納係の家を第二階、左にキャバレーを第一階に、ホテルを第二階に、そして一番高い所で、左と右を橋でつないで、そこを自転車競争の審判台にし、部分照明によって次々に進行する仕組みである。そのうち雪の野原などは

スノコ（舞台の天井）から殆んど垂直におろされた真っ白な縄梯子であり、その途中に直径三メートル程の真っ白な円形がバックとして釣りおろされ、紙の雪がチラチラと降る。出納係は縄梯子をつたって、スノコから逃げおりてくる。その途中で下手二階のホテルの屋上につくられた真っ黒な骸骨のあかりが明滅する、というわけだ。舞台稽古の日に土方氏は「この舞台装置をつくる金で、本当の家が三軒建ちますよ」といった。

①

因みに村山の記録で言及される伏見直江については、劇団の衣装担当たる土方梅子夫人の回想も興味深い。「後に映画女優として活躍した（伏見）直江、信子の二人とも、築地に参加したのですが、両親が田舎廻りの役者だったために、小さい時から舞台に立ち、築地に来た時は、すでに相当の演技力をもっていました。しかし、二人は旅廻りの生活で、小学校にも通えなかったので字が読めませんでした。築地のように台本を使って稽古する経験がなかったので、必要もなかったのでしょう。とても明るい性格で、皆に可愛がられていましたから、手の空いている人たちは、代りあって小学読本を教えました。」②

綿密な記録『私の築地小劇場』を遺した浅野時一郎は、築地小劇場の第一期公演すべてを観劇した。ただの芝居好きであった学生浅野は、五枚綴じの割引入場券で、ときには同じ上演に再三赴いたと言う。『朝から夜中ま

① 村山知義著『演劇的自叙伝2』二五一―二五四頁。

② 『土方梅子自伝』一〇三頁。

で』の舞台は、彼がとくに感銘を受けたひとつである。

『朝から夜中まで』（浅野時一郎著『私の築地小劇場』）

私はできるだけ上演戯曲を下読みして行った。劇場へは早めに着くようにして、開演前の気分に着きをもたせるようにした。開幕後に客席へはいるようなことは一度もしなかった。何一つ見落すまいと緊張して舞台に見入った。私だけではない。右を見ても左を見ても、おなじような熱心な観客ばかりだった。舞台では俳優が額に汗して演技をしていた。そこには余裕もないが、怠慢や遊びもない。これが築地小劇場の雰囲気を作る大切な要素だった。こうして小屋全体に自然と厳肅な気分が満ちてくるのも当然のことだった。芝居小屋らしくない緊張が支配していたのである・・・

十二月は創設期の築地で一番はなばなしい話題を作ったカイゼル作『朝から夜中まで』の上演があった。カイゼルは表現派の作家の中で日本では一番有名であり、この戯曲も震災前年あたりに小山内薫によって紹介されていた。それは戯曲の翻訳でなくて、解説であった。そして築地の演出予定には早くから出ていたものである。しかし評判を高くした最大の原因は、村山知義のデザインした構成派舞台と呼ぶ舞台装置の、目新しい新機軸にあるのだった・・・

ドラがいつものように鳴って、灯が消えると、「朝、から、夜中、まで」と上から順々に右へ左へ移りながら、ランターンに灯がはいって、芝居の題をつげる。それが芝居の始まりであった。一杯道具と同じことなので、そのあちこちを巧く使って芝居は進行する。そのくふうがなかなかおもしろい。主人公が天井から

縄ぼしごを伝って、舞台へおりて来る場もあった。雪の原野とか、六日競争の競技場とかが暗示的な場面も、光や効果の助けを借りて、この組立てた骨組みの上でりっぱに感じを出していた。銀行の出納口、競技場の切符売場、出納係の家、そういう狭い場面は特にうまく感じを出していた。「この人を見よ」という最後の文字が消えるまで、私は好奇心で緊張して見ていた。そしてまことに楽しかった・・・

千田独自の表現派的な演技は、この時はつきりとして姿をとったのであった。あれには土方与志の指導もあったろうが、異常な努力と才分がなければできないことではない。『海戦』でのデビュー以来、『人造人間』のロボット、『瓦斯』の技師、『夜の宿』のべベルを経て、千田は確実な一つの存在となった。ほかの俳優では、山本安英のひどくムキな、ほほえましいほどムキな救世軍士官の役が目に残っている。①